



今回の紀要第13巻には、本学におけるプロジェクトのひとつ「Archival Archotyping」が主催したふたつのシンポジウム、「メディア表現学会(仮称)：オンラインにおける表現とプラットフォームを『共集性』から考える」と「〈NFTアート〉の可能性と課題」が収録されることになりました。

Archival Archotypingとは、作者が作品を制作する段階から、創造的行為を新たな創造のために機械学習による学習モデルとして記録、保存することにより、アーカイブ(創造のための編纂手法)とアーキタイプ(原型)を同時に実現しようという考え方です。この考え方を思索し、機械との協働により人の創造的行為をアーカイブすることに挑戦しつつ、単なる道具、奴隷、代替のいずれでもない、「鏡」としての人工知能を探求することを掲げた同名のプロジェクトをクワクポリョウタさん、松井茂さんと共に立ち上げ、2019年から活動してきました(立ち上げの経緯や初年度の活動については本学紀要第11巻pp. 51-76を参照してください)。

いっけん、人工知能とアーカイブに関する研究を行うはずのこのプロジェクトと、「共集性」および〈NFTアート〉をテーマとするこれらふたつのシンポジウムは関係がないように見えるかもしれません。それでもこれらは、プロジェクトの参加者が社会の様々な出来事に応答するなかで生まれた企画であり、確実につながっているのです。第1の特集、オンラインにおける表現とプラットフォームは、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行で物理空間における活動が制限され、新たな形態の活動が活発化し、アーカイブという視点で見た時の課題が顕在化する現場からの報告です。第2の特集、〈NFTアート〉には、作品そのものではなく、作品に関わった人々の痕跡を記録する新たな手法としての可能性を見出すことができます。

今年度はArchival Archotypingのプロジェクト最終年度であり、通常であればこれまでの活動を収斂させ、まとめていく段階にあるはずです。しかしながら私たちは、これまでの活動を踏まえつつ、次の活動へと繋げるため、発展的に解散することを目指しています。もし、このプロジェクトの痕跡が読者にとって新たな創造のための基盤となれば、望外の喜びです。

小林茂 (Archival Archotyping 研究代表者)